「2012 オリンピック教育国際セミナー」
The International Conference for the Olympic Education 2012

日時：2012 年 12 月 1 日 13:00～17:00
2012 年 12 月 2 日 10:00～17:00
場所：茗渓会館・筑波大学東京キャンパス 1F134
主催：筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）,日本オリンピック・アカデミー（JOA）
共催：日本体育学会茨城支部
後援：国際オリンピック委員会
国際オリンピック・アカデミー
外務省
文部科学省
日本オリンピック委員会
日本スポーツ振興センター
日本体育協会
東京 2020 オリンピック・パラリンピック招致委員会
ミズノスポーツ振興財団
日本障害者スポーツ協会日本パラリンピック委員会
日本オリンピアンズ協会
日本パラリンピアンズ協会
嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター
出席：110 名（2 日間合計）
趣旨：

2011 年に本助成を受けて行われた「オリンピック教育国際セミナー・第 34 回 JOA セッション」では，アジア各国のオリンピック教育の実状や課題について報告された．それを一つの契機として，日本では様々なオリンピック教育に関する試みがなされはじめている．今回は，それらの実践に関する情報を共有するとともに，ギリシャの国際オリンピック・アカデミー（IOA）講師を迎え，今後のオリンピック教育の内容と方法を検討したものである．

ロンドンで行われた第 30 回オリンピック競技大会は，26 競技すべてに女性の種目が行われ，204 カ国・地域から女性アスリートが参加した画期的な大会であった．わが国でも史上最多のメダルを獲得し，話題を呼んだ．このような時期にオリンピック教育について議論し，オリンピック・ムーブメントの理解を進めることは，まさに時期を得たものである．

1. プレセミナー「オリンピック教育の実践」

プレセミナーでは，オリンピック教育の実践的な授業実践を行った．国際オリンピック・アカデミー（ギリシャ）の修士課程プログラムで講師を務めるパラスケビ・ロンピ氏を特別講師として，関東や長野の高校生・大学（院）生，計 24 名が受講した．

講師は，2004 年のアテネ大会の際に展開された，ギリシャにおけるオリンピック教育の実践例を示した．

その内容は，オリンピックの 5 つの価値：“Joy of Effort”, “Fair Play”, “Respect for others”, “Pursuit of Excellence”, “Balance between body, will and mind”をテーマに据え，学生がインターネットを用いた調べ学習を行うプロジェクトメソッドという方法で展開された．

①講師による授業内容，基礎知識の提示

上記の 5 つの価値に関し，まずは講師からそれらの基礎的な理念について説明がなされた．参加者は 5 つのグループに分けられ，各グループが 1 つずつの価値を担当し，関連する事例や逸話などを調べることを課題とされた．授業は主に英語で行われたが，各グループには 1 人以上の語学サポーターが参加し，進行を支援した．

②グループワーク

各グループは，担当するそれぞれの価値について，オリンピックやパラリンピックの有名なアスリート，開催都市，その他スポーツにまつわる逸話などを，生徒が興味に合わせて調べ学習を行った．必要に応じて，講師は助言を行った．

グループワークでは活発な議論が展開された

③グループ・プレゼンテーション

各グループは，調べた内容を模造紙（あるいは power point）にまとめ，他のグループに対しプレゼンテーションを行って知識の共有をはかった．持ち時間は 10 分程度，他のグループは発表内容に関する質問を行った．各グループそれぞれの興味に応じて，オリンピックやパラリンピックに関連する多岐にわたる情報が調べられており，全体としてオリンピックの 5 つの価値について理解を深めることができた．

東京・長野の高校生グループによる発表

これまで，オリンピック教育をテーマとして取り上げる際には，国内外における理論的な検討が主であった．今回のプレセミナーで展開されたギリシャにおける授業実践は，今後，日本のオリンピック教育を議論していく上で，有意義な資料として活用していくことが可能であろう．

2. JOA オリンピック・レクチャー015
「日本の女性アスリートにみる歴史と課題」

ニューヨーク市立大学准教授のロビン・ケットリスキー氏により，上記のテーマでレクチャーが行われた．以下に発表の要旨を報告する．

---

19 世紀の終わりまで，日本の若い女性の大半は，さまざまな体育に接していたが，それらは今日，私たちが考える体育やスポーツとはかけ離れたものであった．日本で若い女性のための体育が導入された時期は，体育と良妻賢母の理念の間に矛盾はなかったのだ．しかしながら，1890 年代から 1920 年代までの数十年の間に，女性の競技スポーツが日本に出現する．

人見絹枝は，1928 年のアムステルダム大会の 800 メートルにエントリーし，オリンピックで初の女子のメダル獲得という歴史を残したが，メディアの扱いは必ずしも肯定的ではなかった．人見の行動や態度は，20 世紀初頭の日本における一般的な構成概念に反するものだったからである．

1936 年のベルリン大会では，水泳の前畑秀子が 200 メートル平泳ぎで金メダルを獲得した．彼女は，勝利から 1 年のうちに結婚し，子どもをもうけた．前畑の人生は，日本における多くのエリート女性アスリートの典型的な例であり，メディアもまた，彼女たちの母親としての達成を強調する傾向があった．

東洋の魔女は，1960 年代初期に国際的に活躍したバレーボールチームである．大松博文が指揮するこのチームは，1960 年代初期の日本社会のジェンダーヒエラルキーを反映していた．大松は，単に男性指導者としてだけでなく，織物工場の女性の製造ラインの作業員の指揮もとっており，甚大な影響力を持っていた．

日本におけるスポーツとジェンダーの交点が複雑であることは間違いない．人見の成功からもわかるように，社会における男性優位が日本人女性を必ずしも‘伝統的’で補助的な立場に閉じ込めてはいなかった．しかしながら，競技を引退後のメディアの取り上げ方は，女性アスリートが良き妻や母になる可能性を理解することで，彼女たちのスポーツ・キャリアには大いな

る賞賛と注目を集めるだけの価値があることを認めようとするものであった．一方で，この一世紀における日本のスポーツウーマンの取り上げ方をみると，あきらかな変化が起こっており，現在の日本社会における女性に対するオルタナティブな選択肢として受容や評価の高まりを反映している．この近代日本のオルタナティブな視点からの女性史は，日本社会における女性の立場が服従しているか，解放されているかといった単純な二分法を超えて思考する枠組みを示している．

ロビン・ケットリスキー氏

3. 基調講演

「オリンピック教育の実践と発展」

プレセミナーで講師を務めたパラスケビ氏が，基調講演を行った．前述のプレセミナーが学生を対象とした実践的な授業であったのに対し，本講演は研究者を対象として，理論的な背景や基礎的な知識の解説が行われた．

オリンピック教育とは，オリンピズムの普遍的な価値や理想に基づいて個々を成長させ教育することである．そして，その特別な生活の態度や行動は教育学的アプローチ，特にスポーツや文化活動を通して養われる．

教育学の専門家によれば，あるカリキュラムを発展させるには，”Content model”, “Objectives model”, “Process model” の 3 つのモデルがある．オリンピック教育にはそのうち，”Objectives model” が最適である．このモデルは，教育の目的・目標を最初に定め，そこに対応する形で，知・徳・体の教育内容をバランスよく配置してカリキュラムを構成する方法である．

例えば，2004 年のアテネオリンピック・パラリンピックに際しては，①ギリシャの人々にオリンピックの理念や大会の開催に関して知識を高めてもらうこと，②教育にスポーツ，文化という概念を組み込み，各個人が人生の哲学を発展させてもらうこと，③ボランティア精神，平和への人々の意識の高揚，④体育やスポーツの地位向上が掲げられた．これらの目的に沿って，様々な具体的なプロジェクトが展開された．その方法は様々であるが，初日のプレセミナーで示したプロジェクトメソッドは，学習者主体のよい具体例としてとらえることができるだろう．

オリンピック教育は各国で様々な定義がなされており，体系的な研究・実践が難しい部分があるが，多くの子供たちに世界的な視野を与えてよりよい世界の創造するために，継続的な取り組みが必要であろう．

パラスケビ・ロンピ氏

4. 国際シンポジウム

「オリンピック教育の実践的展開を考える」

現在，日本国内では，さまざまなオリンピック教育に関する試みが継続して行われている．このシンポジウムでは，パラスケビ・ロンピ氏の基調講演を受けて，日本での事例を報告し，オリンピック教育の内容とその方法について，検討がなされた．コーディネーターは真田久氏（筑波大学・CORE 事務局長），竹村瑞穂氏（早稲田大学・JOA セッション委員会）が務めた．パネリストは，それぞれのフィールドを持つ 5 名が登壇した．

井上雅規氏（兵庫県中番小学校）からは，小学校におけるオリンピック教育の展開について報告があった．オリンピック教育を，継続的かつ普遍的に展開していくためには，小学校の教育課程にどのように位置づけるのかが重要であ

り，教科・領域の枠を越えた幅広い展開が求められることが指摘された.

宮崎明世氏（筑波大学・筑波大学附属高等学校兼務）からは，高等学校におけるオリンピック教育の展開について報告があった．体験的学習を伴った体育理論の授業の実践事例が紹介され，知識だけでなく体験を通して学ぶことで，生徒の理解が深まる可能性があることが示唆された.

花岡勇太氏（筑波大学附属桐ヶ丘特別支援学校）からは，特別支援学校におけるオリンピック教育の展開について報告があった．個々の児童生徒の学習上や生活上の課題を踏まえつつ，内容の取扱い上の時間的な制約を乗り越えなければならないといった実施上の問題について説明があった．運動会などの既存の学校行事をオリンピック教育の観点から改めて見つめ直し，学校や児童生徒の実態に合ったオリンピック教育の在り方を探る必要性について報告があった.

池田めぐみ氏（JADA アスリート委員・オリンピアン）からは，日本アンチ・ドーピング機構のアスリート委員の立場から，ドーピング防止教育・啓発活動の実際について報告があった．また，オリンピアンがロールモデルとして次世代アスリートを「真のチャンピオン」として育成しようと自覚することや，その責任ついても言及された.

ロビン・ケットリンスキー氏（ニューヨーク市立大学）からは，女性アスリートとオリンピックについて報告があった．オリンピックは，ジェンダー差別とジェンダーの平等の双方に多くの実践的な事例を提供することができる．時代を超え世界各地で，女性のためにその境遇がどのように変わったのかについて教えるツールとして，世界中の教室で有効な機能を果たしうることが発表された.

具体的な実践例の紹介，題材となるテーマや展開方法の可能性について，活発なディスカッションが行われた.

登壇者・司会・ゲスト

5. まとめ

オリンピック教育に関し，理論をふまえた「実践」に重点を置いた研究は，国際的にみても数少ない．本セミナーは国内外のオリンピック教育関係者が，国際的に評価のある授業事例を鑑みて議論を深めた点で，有意義であった．今後は，本セミナーで検討されたこれまでの実践例を手掛かりとして，日本の教育システムに沿った理論構築や教材作りを進め，それを国際的な研究会の場で積極的に発信していくことが求められるだろう.

最後に，今回の国際セミナーを共催し，かつ助成をいただいた日本体育学会茨城支部に謝意を表したい．あわせて，来賓の文部科学省文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課課長杉浦久弘氏，祝辞をいただいた国際オリンピック委員会会長ジャック・ロゲ博士,国際オリンピック・アカデミー会長イシドロス・クーベロス博士に，感謝の意を示したい. CORE は今後も，日本のオリンピック研究センターとして，積極的に活動していく所存である.